

Picart, Bernard

Cérémonies et coutumes religieuses de tous les peuples du monde ; représentées par des figures dessinées de la main de Bernard Picart. 12 v.

Paris, L. Prudhomme, 1807—1810. (文献番号5—4)

Hiler p.708 Lipperheide 1808

ピカル画

世界の宗教儀式と慣習 全12巻

世界中に存在するあまたの宗教を取り上げ、多数の貴重な論文をもとにその宗教儀式としきりについて詳述した大作。随所に差し込まれたピカル (B. Picart 1673—1733) の版画はこの厳めしい著作に親しみを与え、単なる宗教事典に類するものでないことを示唆している。18世紀に出版された著作集を基盤にして、新たな改訂版として発刊されたこのシリーズは、宗教が世界で何処においても庶民の生活と密接に結びつき、宗教を語るとはすなわち人々の風俗風習を語ることに繋がっていた時代の様相を示してくれる。宗教に関する著作でありながら、社会や生活を写し出した民俗資料にもなっているところが興味深い。

ピカルの版画を掲載した『偶像崇拝の宗教儀式』と題する著作が、ベルナール (J. F. Bernard) によってオランダで出版されたのが1723年である。これは好評のうちに1737年までに7巻が発行され、その後もフランスやオランダで印刷再版されていった。当シリーズは、初版のオランダ版に1741年出版のフランス版の一部を加え、全体に補足訂正を行うとともにその後の研究成果を加えて12巻に収めている。オランダ版を採用した理由は、教理問答や厳しい正統性が云々されているフランス版に比べて、率直で簡潔な語り口となにより公平さを貫いているところにあったと、はしがきに述べられている。当初から、専門の学者向けではなく平易な文章で書かれた一般向けの解説書として出版された。

第1巻は、前半がユダヤ教の儀式とユダヤ教徒のしきたり、後半ではカトリックの聖職者の宗教儀式について述べられており、32枚のピカルの版画が壮麗な儀式の様態を再現している。第2巻は、同じくカトリック教の祈禱・祝祭・秘跡、聖職位階制とローマ教皇庁のしくみ、異端審問の歴史、が述べられる。秘跡のなかでも我々にも親しい洗礼式や終油、葬儀、婚礼といった儀式のありさまは、ピカルの人間味あふれた場面



描写によって、あたかも風俗版画をみるようなたのしさを与えてくれる。第3巻は、前半はギリシア正教を、後半はプロテスタントの諸派を取り上げている。ギリシア正教も中東、アフリカ、ロシアの宗教儀式に及び、後者は福音派、改革派、カルヴァン派の各しきたりに及ぶ。ここでも各派の婚礼や葬儀の場面は宗教と結び付いた庶民の生活を率直に表現している。第4巻では、前巻に続いて英国教会、ピューリタン、クエーカー、ジャンセンスト、再洗礼派、メノー派、アダム派などに及ぶ。第5巻は回教に移り、その神学やマホメットやコーランについて解説し、各国の回教徒の祭りや婚礼や服装の版画が加わる。第6巻は、バラモン教のドグマと慣習、インドの神々の歴史、後半は、インド各地域の宗教、さらにシャム、ラオス、フィリピン諸島、ボルネオ、スマトラ、ジャワなどの宗教に及ぶ。第7巻は、中国と日本、アフリカ、アメリカインディアン、メキシコ、カリブ、南米各地の宗教としきたりを取り上げており、新改訂で付け加えられた箇所が多い。第8巻は再びカトリック教会にもどり、宗教儀式の歴史と中世に盛んだった「愚者の祭り」(Fête des fous)の歴史、第9巻ではキリスト教圏に共通の儀式とその歴史、そして1788年から1809年までにあった重要な宗教儀式の記録を加えている。カトリック教会の歴史に触れたこの二巻は、ピカールの遺作を加えて神父らが執筆した、1741年のフランス版から抜粋されたものである。第10巻は、最初に南太平洋、オセアニアの宗教、次に18世紀から当時までに誕生し変化した宗教、すなわちメソジスト、分離派、長老派、ユニテリアン派など多数の宗派について、敬神博愛教徒の誕生と衰退、フリーメイソンの歴史と入会の儀式、第11巻は、聖書・公会議決議書・神学者の見解による「迷信」について、魔法使いの迷信、迷信と自然現象に関する論文、第12巻では宗教に反する習慣と行動をもたらしした迷信と偏見、すなわち迷信の歴史に関する詳細な論文集となっている。最後の二巻は、このシリーズで初めて加えられたもので、著名な僧侶らの論文を引用している。

内容のうえでは世界の宗教のあらゆる宗派を網羅し、カトリック教会の歴史から迷信の論述までに及んだ大作ではあるが、このシリーズのタイトルにもうたっているように、ピカールの手になる版画がなければ、初版以来80年近くも評価を保つことは難しかったであろう。ピカールは当時のオランダを代表する版画家であり、各地の服装版画集などの作品も残している。各宗派の集会や洗礼や葬儀のやり方、世界各地の祈禱や儀式、特に中国や日本の寺院や仏像などは当時の読者には珍しい光景だったであろう。もっとも当時の情報量を考えれば致し方ないことだが日本の寺院の中の民衆の姿や釈迦や観音、阿弥陀、大仏の像などは、やはり似て非なるものである。8巻以後は図版が半減するが、ピカールの諸作品は、登場する人物の動作や身なり、まわりの背景、不可思議な儀式や集会の有様など、どれをとって見ても18世紀の風俗に触れることができる貴重な資料といえる。

図は「司祭が執行する洗礼式」

(辻)